

氏 名(生年月日)	渡 會 侑 子 (昭和61年 8 月25日)
本 籍	山 形 県
学 位 の 種 類	博 士 (歯 学)
学 位 記 番 号	甲 第 1 1 7 7 号
学位授与の日付	平成30年 2 月27日
学位授与の要件	
学 位 論 文 題 目	<b>A new method for determination of occlusal vertical dimension : Relationship between free-way space and area of upper prolabium in lips touching mandibular position</b>
論 文 審 査 委 員	主 査 宮 川 行 男 副 査 渡 邊 文 彦 遠 藤 敏 哉

### 論 文 内 容 の 要 旨

適正な下顎位で咬合採得をすることは、顎口腔系と調和した歯科治療を行ううえで極めて重要である。本研究の目的は、下顎安静位誘導法として新たに閉口時口唇接触位による方法を考案し、従来の方法により得られる下顎位と比較することで、閉口時口唇接触位が咬合高径の決定に有用である可能性を検討し、さらに、閉口時口唇接触位における安静空隙量と口唇赤唇部の面積との関係についても明らかにすることである。

対象は健常有歯顎者とし、従来法である安静時における被験者固有の下顎位と唾液嚥下後の下顎位、そして閉口時口唇接触位の3条件における鼻下点・オトガイ点間距離を測定し、喉頭嵌合位における測定値との差から算出した安静空隙量を比較検討した。また、各条件における空隙量の再現性を比較する目的で、変動係数を求めた。さらに、正面顔貌規格写真を撮影し、画像解析ソフトを用いて上下口唇赤唇部の面積の測定を行い、閉口時口唇接触位における空隙量との関係を検討した。

その結果、以下の結論を得た。

1. 安静空隙量の中央値は、閉口時口唇接触位が安静時における被験者固有の下顎位と唾液嚥下後の下顎位との間に位置していた。
2. 閉口時口唇接触位は、安静時における被験者固有の下顎位ならびに唾液嚥下後の下顎位に比べて安静空隙量の変動係数が有意に小さく、再現性に優れていた。
3. 閉口時口唇接触位における安静空隙量と上唇赤唇部の面積との間に、高度に有意な正の相関が認められた。

以上のことから、閉口時口唇接触位による方法は、従来用いられている誘導法と比較し、より再現性の高い下顎安静位誘導法であることが明らかとなった。また、上唇赤唇部の面積は各個人の適正な安静空隙量を設定するための基準として有効であることが示唆された。

### 論 文 審 査 の 要 旨

本研究は、より再現性の高い下顎安静位誘導法と各個人の適正な安静空隙量の設定基準を探究する目的で、新たに閉口時口唇接触位を用いる方法を考案し、従来の下顎安静位誘導法により得られる下顎位と比較するとともに、閉口時口唇接触位における安静空隙量と上下口唇赤唇部の面積との関係を検討したものである。その結果、閉口時口唇接触位は、再現性の高い下顎安静位誘導法であることを明らかにするとともに、上唇赤唇部の面積が適正な安静空隙量を個別に設定するための指標となることを示唆した。これらは、歯学に寄与するところが多く、博士（歯学）の学位に値するものと審査する。